自殺日誌

森宮 秋広

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺日誌

【Nコード】

N6514I

【作者名】

森宮 秋広

【あらすじ】

自分の存在意義が見い出せないまま生きる男。

生きている意味などないとわかった男は、ついに自殺をはかってしまふ。

自殺した男の逝った世界で待っていたものとは……。

遺書（前書き）

この小説は社会問題にもなっている“自殺”について執筆したものです。

今一度“自殺”について考えてみませんか？

遺書

遺書

私は子供の頃から死ぬというのが怖くはありませんでした。死ぬという事に対して何も抵抗が無かったのです。むしろ、死んだ事により周りが悲しんでくれるのなら、いつ死んでも良いと考えていました。

しかし、その考えを改めさせてくれる存在が現れたのです。それは妻と子供です。一人っ子だった私は両親を子供の頃に亡くしてから、家族というもの忘れていました。しかし、それを教えてくれたのが妻と子供という存在だったのです。私はとても幸せでした。二人の為なら辛い事も、苦に思わなくなりました。そしていつのまにか死にたいと考えなくなっていました。反対に、死ぬ事への恐怖が強くなっていったのです。

この幸せがいつまでも続けばいいと思っていました。しかし、人生は良い事ばかりじゃありません。いつのまにか私たち夫婦の歯車は噛み合わなくなっていました。妻は子供と一緒に家を出て行ったのです。拳句の果てに長年勤めていた会社からの突然のリストラ通告。私はどん底まで突き落とされました。

最近思うのは、私はこの世に生まれてこなければ良かったのかもしれないという事です。毎日生活していても、何故生きているのか、どうしてこの世に存在しているのか。その理由を見つけられないでいます。仕事をしていても、家に帰っても、そこには私の存在意義を示してくれるものが無いのです。だから、もともと私には存在意義なんて無かったのかもしれない。

（存在している意味が無いのなら死んでしまおう。）
それが私の出した結論でした。しかし、私が死ぬ事で本当に悲しんでくれる人はいるのでしょうか。私の両親はもう亡くなっているし

兄弟もいない。家を出ていった妻と子供は悲しんではくれないだろう。もともと友達が少ない私の事を同級生も覚えちゃいないだろう。そう考えると、これまでの人生がどうでもよくなってきました。もう私には何も思い残す事がありません。この世に、後悔も未練も無いのです。ただ、もしも私が死ぬ事を本当に悲しんでくれる人がいるのだとしたら、私は謝らなければいけません。

ごめんなさい

自殺

自殺

毎日がいつもと同じような朝を向かえ、いつもと同じような夜で終わる。変わっていたのは私だけで、後は何も変わらなかった。そんな日常を全部壊してしまいたかった。でも、私にはそんな勇氣などなかった。

その日も、いつもと同じ時間に起き、いつもの様に着替え家を出た。しかし、一つだけ違う事は、私には行く場所なんて無いという事だ。普段なら眠い目をこすり、欠伸をしながら会社に出勤している時間なのだが、もうその必要はなかった。私は会社とは逆の方向に歩いていた。そして家の近くにある公園へ向かった。平日の朝からスーツ姿で公園のベンチにずっと座っている奴なんてリストラされたサラリーマンくらいだろう。実際私もそうだった。家にいてもする事などなく、毎日ように足を運んではぼーっとしていた。いつの日からかそれが日課になっていた。

いつからだろう。死にたいと思うようになったのは……。

仕事をリストラされたから？妻が愛想を尽かし子供を連れて出て行ったから？もつと他の理由？それとも、その全て？

そんな事を考えている時間が増えていた。
今思えば、私がまだ子供の時から死ぬという事に対して抵抗が無かったのかもしれない。

私がまだ小学生だった時に、父は自殺した。朝会社に行くと言って家を出たその足で、向かってくる電車で飛び込んだのだ。

父が死を選んだ理由などわからないが、毎日忙しそうだった父はストレスを溜めていたのかもしれない。父は仕事人間だった。休日も家にいることなど滅多になく、私が朝、目を覚まし、二階の部屋から居間に降りてもそこにいるのは、いつも母一人だった。

そんな父だったが、私は大好きだった。忙しそうな父だったが、授業参観や運動会など学校の行事には、仕事を休んで来てくれるからだ。もしかしたら世間ではあたりまえなのかもしれないが、私にはそれが嬉しかったのだ。

ある日曜日の朝、私がいつものように居間に降りると、父がテレビを見ながら朝食を食べている姿があつた。そして父は

「おはよう!」

と挨拶してくれたのだが、私にはそれがどうも照れくさくて、

「お、おはようございます。」

と、つい小さな声で返してしまった。そんな私に注意することなく、「今日はどこに行きたい?」

と、聞いてきた。しかし私は何故か遠慮してしまい

「どこでもいいよ。」

と、答えてしまった。その答えに少し困った表情を浮かべた父だったが、少し考えて言った。

「じゃあ、遊園地に行くか!」

顔には出さなかったが、私は嬉しくて急いで朝食を食べたのを覚えている。母の笑顔も久しぶりに見た様な気がした。

遊園地は休日で混んでいたが、乗り物なんかより、家族でいる時間が楽しかった。両親と手を繋いで歩いているのが楽しかった。そして、あつという間に、一日が過ぎていった。

閉館時間ギリギリまで遊び尽くしたが私にはまだまだ足りなかった。もつとこの時間が続けばいいと思った。だが、父と母はさすがに疲れちゃまっている様だ。

家に帰る車の中で私は、

「また三人で何処か行こうね!」

と言った。助手席に座っている母はクスクス笑っていた。

「おう！また暇ができたらな。」

と、父が答えてくれた。

「でも、ちゃんと勉強して良い子にしてたらすよ。」

と、母が言った。その日から、次は何処に行こうかと考える様になった。母との約束も守り勉強も一生懸命頑張った。

しかし、家族三人で何処かに出かけたのは、それが最初で最後だった。父が自殺したのは、それから三ヶ月後の事だった。

小学生とはいえ、？死？というものがとくに理解できる歳だった私は、優しかった父にもう会えないと思うと、悲しくて毎日泣いていた。母も周囲には気丈に振舞っていたが、一人になると声を押し殺しながら涙を流していた。そんな母の姿など見た事のない私はその時はおどろいたが母の悲しみの方が私なんかより大きかったのだろう。

そして、父が自殺してから一週間後に今度は母が自殺した。

私が目を覚まし居間に降りると、母は首を吊って死んでいた。母の死体を見つけた時の事は今でもはっきりと覚えている。天井からぶら下がっている母を必死に助けようと引張っていた事。強く引張りすぎて目の前に母が落ちてきた事。その母の死体を揺すりながら話しかけていた事。でも、もう母は何も話してはくれなかった。・。その後の事は何も覚えていない。

後から聞いた話だと、私は泣きながら隣の家を駆け込んでいたらしい。

その後は、父方の親戚に引き取られる事になったが、そこにはもう私の家族と呼べる人がいなかった。私はずっと、独りだった。そして、私を残して死んでいった両親を恨むようになっていった。・。・。

今になって子供の頃の事を思い出すなんて。・。・。結局はそれがトラウマになって？死？というものを意識していたのかもしれない。だが、今更そんな事を考えたって仕方がない。もう過去には戻れない。

いのだ。もしも今、何処かの誰かがタイムマシンを完成させ、自分の行きたい過去へ戻れるようになったとしても今の私にはそんなもの unnecessary。だって、もう、手遅れだから・・・
私は、電車に轢かれた自分の姿を見下ろしていた。

私は、自分で自分を殺した・・・

もう死体となった自分の姿を見ても、気分は落ち着いていた。それなりの覚悟をもって線路に飛び込んだからだろう。自分はこんなに落ち着いているのに、ふと横のホームに目をやると、泣き叫ぶ人たちや野次馬の姿が目に入った。あんなに叫んでいる人がすぐそこにいるのに、私の耳には一切の音が入ってこなかった。無音の世界・・・

最初は抵抗があつたが、すぐにそれが死ぬという事なんだと思つた。
(これからどうなるんだろう?)

死んだ後の事なんて、考えているわけもない。このまま幽霊として彷徨い続けるのだろうかと考えていると、急に目の前が真っ暗になった。

(そうか、もうあの世へ行くのか・・・)
手を伸ばしても何も無い。何も見えない。? 孤独? には慣れているはずだった。しかし、本当に? 孤独? となった私を不安と寂しさが襲ってきた。

.....

この真っ暗な場所に閉じ込められてどの位の時間が経つただろうか。数時間、いや一日はこうしているだろうか・・・。何も無い、真っ暗な空間に長時間いると、人は精神がおかしくなるらしいが、私は平気でいられた。最初の不安もいつのまにか消えて、逆にこの空間が本来自分の望んでいた場所なんではないかと考えるようになって

いた。もちろん自殺した事を後悔なんてしていない。ただ、心残りがあるとすれば、毎週見ていたドラマの最終回をもう見る事が出来ないという事だった。そんなくだらない事を考える位、心に余裕が出来ていた。そのせいもあってなのか私はいつの間にか眠ってしまった。

そして、夢を見た・・・

私は何も無い一面真っ白な世界にいた。全てが真っ白なので、上下左右の感覚がわからなかったがどうやら寝ているようだ。すると、遠くの方から足音が聞こえてきた。一つじゃない。何人もの足音があった。だんだんと近付いてくる。何もわからない私は怖くて逃げ出したかったが、体を動かさそうと思っても全く動かなかった。そして沢山の人が寝ている私を取り囲んだ。全員が私を見ている。みんな何か喋っているようだ。声が小さすぎて何も聞こえなかった。

(どこかに行ってくれ！)

私は心のなかで叫んでいた。そして恐怖のあまり目を閉じた。

そこで私は目を覚ました。しかし、目を覚ました私はもう真っ暗な世界にはいなかった。目の前に広がっていたのは夢に見たままの真っ白な世界だった。しばらくの間まだ夢を見ているのかと思ったがどうやらこれは現実らしい。そして私がここを？あの世？だと理解するのに、さほど時間はかからなかった。

どこまでも続いていそうな真っ白い世界。まさにあの世という場所にピッタリだと思った。しかし、あの世に来たからといって私にはこれからする事なんてない。そもそも、もう死んでいる私にこれからがあるのだろうか？

その時、後ろから急に声をかけられた。

「あなたさつき、線路に飛び込んで自殺しましたね？」

不意を突かれた私は、その場に尻もちをついた。振り返ると、そこ

には全身黒い服を着た小柄の若い男が立っていた。さっきまで誰もいなかったのに、突如現れたその男に驚いた私は声を出す事が出来なかった。そんな私を見て、その男は繰り返した。

「あなたさつき、線路に飛び込んで自殺しましたね？」

少し冷静さを取り戻した私は男の質問に答えた。

「そうだけど、あんたは誰だ？」

そう答えると、男はにっこり笑って更に続けた。

「思っていたよりも早かったですね。本当は私の方が早く着いて待っていないといけないんですけど……。でもそれはあなたが自分の死を理解する時間が早かったわけで、私が悪いというよりもあなたが早すぎたのが悪いというか……。でも、早く来て悪いわけじゃないので、おあいこという事にしときましましょうか。

決して私が遅刻したわけではないのであしからず。」

男は言いたい事だけ言い、こっちの質問には答えなかった。

「おい、聞こえなかったのか？あんたは一体誰なんだ？」

「あつ、自己紹介がまだでしたね。私、死神をやらせてもらってます。」

そう言うと男は更に続けた。

「驚いたでしょ？うんうん、わかりますよ。いきなり目の前に現れた男が自分を死神なんて言うんですからねえ。信じられないのも無理はない。むしろ信じろという方が無理ですよねえ。でもね、全て本当の事なんですよ。あなたが死んだのも、私が死神なのも。クツ、クツ、クツ。」

男は気味の悪い声で笑った。少し落ち着きを取り戻した私は動揺しているのを悟られない様に死神に言った。

「あなたが死神なのはわかった。それに俺が死んでいるのもわかっている。」

それでいったい俺になんの用があるんだ？あんたが死神なら、もう死んでいる俺なんかには用はないだろ？天国か地獄にでも連れて行ってくれるのか？」

そう言うと死神の顔が変わった。

「天国？地獄？それはこれから決まるのです。それに、あなたはなにか勘違いをしてるみたいだ。」

「勘違い？」

「そう。死神は死んだ者には用はないと……。」

それは違います。私たち死神は死んだもの、いや、自ら死んでいった者。そう、あなたみたいな自殺者にこそ用があるのです。」

「……。」

「死神は生きている人間の命を奪うとでも？それは、あなたがた人間が考え出したイメージに過ぎない。実際は違います。まっ、詳しい事はこれからだんだんと解っていくと思いますよ。」

今の私には、死神が言っている事が理解できなかった。

「少し、説明しましょうか。もうすぐたくさんのお客さんが来る時間だ……。」

お客さん？何を言っているのか解らなかった私は、すぐに尋ねようと声を出したのだが、死神が話を続けたため、私の声はかき消された。

「あなたはもともと決められていた命を自ら削りました。本当はもっと生きていくはずだったのね。その宙に浮いた残りの命は私の命になります。ここまででは理解できますね？」

私は小さくうなずいた。

「よろしい。あなたはそれでいいかもしれない。ですが、あなたと係わった者の人生や命が、あなたの死によって少なからず変わっているのです。まっ、急にそんなこと言われても混乱するだけですよね……。」

そう言うと、死神はどこから取り出したのか分厚い紙の束に目を通した。

「あなたには奥さんと子供もいますね。その人間たちだけじゃない。あなたと関わった人間がこれからどういう人生を辿るのかも、あなたは知る義務があるのです！」

全く考えていないわけではなかったが、ただ死んで楽になりたいと思っていたのも事実だった。

「ちようどみなさんも来たみたいですねえ。」

そう言つて死神は私の後ろの方を覗いた。振り返ると、遠くの方から何人もの人が列を成してこちらに向かつて歩いて来ている。私は振り返り死神の顔を見た。

「これからおもしろくなりますよ。クツ、クツ、クツ。」

死神はそう言つとまた気味の悪い笑みを浮かべた……。

関係者

関係者

さっきまであんなに遠くにいた集団が、あつという間にすぐそこまで近付いていた。近くにきてわかったのが、その集団は何十人どころの人数ではなかった。何百人、いや、千人近くはいるだろう。その時、死神が口を開いた。

「あつ、聞くのを忘れていました。あなたは、これから自分が天国と地獄、どちらに行くと思います？」

あなたが今まで生きてきた人生を振り返ってみてください。あなたは生きていた時、良い人間でしたか？それとも悪い人間でしたか？その質問に私は生きていた時の自分の姿を思い返していた。

（私は良い人間だったのだろうか？）

家庭の事を思つて一生懸命仕事はしていた。少しでも生活を楽にしようとして、毎日残業してたし、休日だって仕事に励んでいた。でも、それが妻には理解されてはいなかった。妻が子供を連れて出て行った時、私はようやくそれに気がついた。妻は私の事が嫌いだっただろう。結局私は、周りからは愛されていなかったのかもしれない。だから会社もリストラされるし、自殺という道を選んでしまったのだろう。私の今まではなんだったのだろうか・・・生きていた時の自分がどうだったかなんて答えが見つからないまま時間は過ぎていった。

「ブー、時間切れです。どうやら答えは出せなかったみたいですね。」

死神の声で我に返った私の周りを、さっきまで遠くを歩いていた人達を取り囲んでいた。それが、ついさっき夢に見た光景に似ている鳥肌が立った。

みんな下の方を見つめながらどこか暗い、悲しそうな表情をしている様に見えた。目も虚ろで自分で言うのもなんだが、まるで生気がない。というか、ここはあの世だ。その人達に何があったのかは知らないがもう亡くなっているのだろう。

「じゃ、みんな揃った事ですし、そろそろ始めますか。」

死神は明るく言った。

「始めるって何を？」

「あれ？まだ説明していませんでしたっけ？これから始まるのは神の審判です。」

「神の審判？」

「そうです。まあ、わかりやすく言うと裁判ですね。あなたはこれから裁判にかけられるのです！」

「ちよつと待て！何で私が裁判にかけられないといけないんだ！ふざけるな！」

「納得いきませんか？」

動揺してしまった私に死神は表情一つ変える事なく冷静に答えた。

死んだ私が裁判で何を争う事があるのか。だが、その答えはすぐに死神の口から発せられた。

「神の審判……。それは自殺した者の逝く道を決める裁判。つまり、あなたが天国で生まれ変わるのを待つか、地獄で今までの行いを反省し生まれ変わるのを待つのか、どちらかが決まります。それがここでのルールなのです。あなたはそれに従わなければならぬというか、それ以外に選ぶ道はない。あなたはもう死んでいるのですから。」

そうだった。死んでいる時点で私は“私であって私ではない”肉體のない魂だけの器。決定権なんてなかった。

「神の審判はわかった。その結果で私がどこに行くのか決まるのもわかった。でも、この人達は何なんだ？」

「この人間たちですか？ここに居る人間は全てあなたの関係者です。」

「

「な、なにを言ってるんだ？私はこんな人達を知らないし会った事もない！関係者であるわけがないだろうが！」

「いいえ。全てあなたの、あなたとの関係者です。」

私は混乱していた。

「まだ、納得いかない事があるみたいですねえ。でも、もうだいぶ時間が過ぎてますからこれ以上は話せません。それに、今の時点であなたにこの人間たちが誰なのかを知る意味が無い……。私の口から説明したところで、あなたは理解するかもしれませんが何の感情も生まれない。」

それでは何も意味が無いのです。だからあなたには関係者自らの証言を聞いてもらいたい。いや、聞く事があなたの最後の使命なのですから。」

後は神の審判が始まれば理解できますよ。今までの人間もみんなそうでしたから。」

私はもう話す事はなかった。話したところで何も変わらないのがわかったからかもしれない。

「ではこれから、神の審判を始めろ！」

これから私が天国に行くのか地獄に行くのかが決まる。今の私にはただその判決が下されるのを待つしか出来なかった。

神の審判

神の審判

「証言者は順番に証言台に立ちなさい。」
死神がそう告げると、私の目の前に突然証言台が現れた。そして一人の男がゆっくりと前に出て、そのまま証言台の方へと歩いて行った。証言台に立った男は、今まで下げていた頭を上げて私の方を見た。歳は三十代後半から四十代前半・・・私と同じ位だろうか。じつと私の目を見続けたまま瞬き一つしない。何度見ても、いくら考えても、私の記憶の中にこの男の存在はなかった。気味が悪くなつた私は目を逸らした。

証言者 サラリーマン

「あなたはこの被告の関係者ですか？」
死神が尋ねると男が暗い声で話し出した。
「はい。私はこの男・・・被告の関係者です。」
その男は視線を私から死神の方へ向けた。
「それではあなたはいつ、被告の関係者になりましたか？」
「私は被告が線路に飛び込んだ瞬間から関係者になりました。」
（線路に飛び込んだ瞬間？自殺した時から私と、この男は関係者になったというのか？）
私には意味がわからなかった。
「私は被告が自殺した時、駅のホームにいました。あの日は大事な取引があつたので早めに家を出て電車を待っていたんです。でも、被告が線路に飛び込んだせいで電車が止まってしまい、復旧の目途もたたず、当初の予定が狂ってしまいました。」

遅刻なんてしたら取引がダメになる。そう思ったので、急いでタクシー乗り場まで走りましたが、もうタクシー乗り場には順番を待つ人で溢れていました。

結局、私がタクシーに乗り込んで取引先に到着した時には、すでに約束の時間を過ぎていて・・・私は責任をとって会社を辞めさせられました。わ、私には借金があるのに・・・。今会社をクビになったらこれから先、どうやって生きていけばいいのか・・・。」

「それは大変でしたね。」

「私は謝りました！必死に！土下座までして謝ったんです。でも、駄目でした・・・。」

「なるほど。それで被告を憎んでいると？」

「はい、許せません。」

死神は先ほど取り出した紙の束に目を通して話した。

「そうですか。それが原因であなたはこれから一週間後に自宅で首を吊って自殺をする。この未来にも間違いないですね？」

「はい、間違いありません。私は一週間後に自殺します。それもこれも全部あいつの責任です！」

そう言う男は私を睨みつけた。目が合った瞬間、私はまた男の視線から逃げるように顔ごと逸らした。

私が自殺しなければ、この男は死ぬことはなかった・・・。突然付きつけられた現実言葉に言葉を失った。

（これからこの男は私と同じように、自分で自分を殺す・・・。）
そう思った時、その言葉に妙な違和感があった。

（一週間後に自殺する？じゃあ、今の時点でこの男は生きているのか？まだ生きているなら何故この場所にいるのか？ここはあの世ではないのか？）

何が何だかわからなくなった私は死神に聞いてみた。

「死神、ちよつと聞きたいんだが。」

「はい。なんですか？」

「この男は、これから自殺するののか？」

「そうですね。本人も言つてたじゃないですか。この人間は今から一週間後に首を吊るんです。」

「じゃあ、今はまだ生きてるんだな？」

「そういうことになりますねえ。それが何か？」

「ここはあの世じゃないのか？どうして生きている人がここにいるんだ？」

「そんな事ですか。それは簡単な事です。ここにいるのは彼らの魂。少し時間を借りて足を運んでもらいました。」

「ちよつと待て！今魂がここに来ているならその人は、いや、ここにいる人達はみんな魂が無い状態でどうしてるんだ？」

「それなら大丈夫ですよ。この時間は人間が生きている世界と違つてゆつくりと時を刻んでいるんですよ。」

「そうですね、例えばあなたがここで一時間を過ごすとしましょうか。あなたにとっては長い一時間に感じるかもしれませんが、あなたが生きていた世界では一分位しか経過していません。」

「もしも、神の審判が長引いたとしても、ほんの数分意識が無くなつているだけです。」

「ただし、全員が生きている訳ではありません。この中にはもう死んでいる者もいます。その者の場合、関係ないですけどね。」

「そうなのか。だけど、もしまだ生きているなら、どうにかしてこの人が生きていける様に出来ないのか？」

「それは無理です！この人間の死はもう決められた事。それを変える事など不可能です。」

「責任を少なからず感じていた私は、もしかしたらこの男を救う手があるのではないかと思ひ聞いてみたのだが、無駄だった。」

「証言者、最後に言い残した事はありますか？」

「死神が問いかけると男は声を震わせながら言った。」

「あ、あんたさえいなければ・・・お、俺は死ななくて済んだんだ！」

「そう言うと男の姿は一瞬にして消えた。目の前には証言台だけが残

されていた。私は一気にいろいろなものを背負った気がして、疲れ切っていた。そしてその場に座り込んでしまった。

「大丈夫ですか？まだ一人目ですよ。まだ何百人といるんですから。」

死神は紙の束をペラペラとめくりながら言った。

「おい、その紙には何が書いてあるんだ？」

私は始めから気になっていた事を聞いてみた。

「これですか？これにはいろいろな事が記されていますよ。あなたやここにいる人間のプロフィールから今まで生きてきた人生、そして未来もここには記されています。」

「そんな事がわかるなら、いちいちこんな裁判なんてしなくてもいいじゃないか。」

「やっぱりそう思いますか？稀に、本当にごく稀にですけど間違った情報が載っている事があるんですよ。だから私は一人一人に真実を聞かなければならない。それもルールなんです。」

「さあ、そろそろ再開しましょうか少し落ち着いたんじゃないですか？」

「そう言つて死神は証言者を呼んだ。次に証言台に立ったのは二人組の今時の女子高生だった。」

証言者 女子高生二人

「あなたたちはこの被告の関係者ですか？」

「はい。私はこのおじさんの関係者です。」

一人がそう言うともう一人も言った。

「私も、このおっさんの関係者です。」

「あからさまに面倒くさそうな態度をする二人に、私は少し怒りを覚えた。」

「それではあなたたちはいつ、被告の関係者になりましたか？」

「私たちはこのおじさんが線路に飛び込んだ時に関係者になりました。」

た」。でもー、別に恨んでなんかいませーん。」

「私も別に恨んでなんかいませーん。あの日、テストがあつたから学校に行くのが超めんどくさくて、サボろうか二人で話してたんだよねー。」

「そうそう、そしたら運よく知らないおっさんが線路に飛び込んでくれて！電車が止まってくれたおかげでテスト受けなくて済んだから超ラッキーだったよねー。」

「ねー。前の日も遊んじゃってー、勉強なんてしてなかったから、誰だか知らなかったけどおじさんに感謝したよねー。」

「でもさ、それってウチらの日ごろの行いがいいからじゃん？」

「それ、言えてるー。」

「てかさ、ここに居るのも意味わかんねーし。」

私は啞然とした。

（人が死んでいるのにこんなバカみたいな奴らも私の関係者になるのか？）

まだ楽しそうにムダ話している二人に死神が告げた。

「最後に、被告に対して言い残した事はありませんか？」

「別に、言い残した事なんてないけど、とりあえず、おじさん助かったよ！」

「本当マジで感謝してるよ。死んでくれて、ありがとう！」

そう言つて二人は消えていった。

「死んでくれてありがとう・・・。」

その言葉はとても重かった。

（結局、私の命なんてそんなものか・・・。）

今の二人のおかげで、生きていた私には存在意義なんてなかった事を改めて思い知らされた。

「ありがとうございますって。良かったじゃないですか、感謝されて。」

と、死神は冷たく言い放つた。そして休む暇もなく次の証言者を呼んだ。

証言者 若い女

「あなたはこの被告の関係者ですか？」

「はい。私はこの男の関係者です。」

「それではあなたはいつ、被告の関係者になりましたか？」

「私はこの男が線路に飛び込んだ瞬間に関係者になりました。」
「今までと何ら変わりない会話が交わされていた。」

「私はあの日、お母さんの病気が悪化したとの連絡を受けて病院へ急いでいました。でも、電車が止まってしまって……。」
「女の声は震えていた。」

「私が病院に着いた時にはもうお母さんは、わたしのお母さんは……。」

「そう言うと、その場に泣き崩れてしまった。」

「お母さんは、亡くなる直前まで私の名前を何度も呼んでいたって……病院の先生が教えてくれて……。でも私はその場に行けなくて……。何も出来ないけど……。最後に顔を見せてあげたかった……。もう一度、生きているお母さんに会いたい……。。」
「女は憔悴しきっていた。」

「証言者、最後に言い残した事はありませんか？」

「死神がそう女に告げると」

「私はあなたを死んでも許さない！一生恨んでやる！」
「そう言つて女は消えていった。」

「あなたは、いろんな人間から恨まれているんですね。」

「二やつきながら死神が言った。
だが、私は腑におちなかった。」

「おい。今の女が母親の死に目に会えなかったのは、全てが私のせい
いか？」

「と、言いますと？」

「母親が死んだのは私のせいじゃない！病気のせいだろう！それを
会えなかったからといって恨まれる覚えもない！」

全部が私のせいにされている気がして納得いかなかった。ここに
いる人全員が私に憎しみを抱いている・・・そんな気がした。しかし、
感情的になった私を対照的に死神は冷静に言った。

「さっきの人間の母親が死んだもとの原因は病気だったかもし
れません。しかし、あなたが自殺したことであなたと係わった人間
の人生が変わっていると、最初に言いましたよね？」

つまり、間接的ではありませんけど、あの人間の母親が死んだのはあ
なたのせいなのです。」

「な、なにをバカな！私はその女の母親になんて会った事もない！
しかも病気で死んだのに、それが私の自殺のせいだって？そんなの
詐欺と一緒にじゃないか！」

「では、あなたは悪くないと？」

「ああ、そうだ。あたりまえじゃないか！それに、さっきの女子高
生たちは何だ！私はそんな事で感謝されるために死んだんじゃない！
最初の男だって、私が自殺したから自分も自殺する羽目になった？
そんなの俺の知った事じゃない！」

「あなたはそれも自分には一切非が無いと言いたいんですか？」

「そ、そうだ。それに、この裁判自体一体何なんだ！私を陥れたい
だけじゃないか！」

だいたい、ここにいる奴らが嘘の証言をしたらどうなるんだ！その
紙だって全部が正しくないんだろ？嘘をついたって本当かどうかわ
からないじゃないか！どうかしてる！」

私は怒りにまかせて、言いたい事を全部言った。

「そうですか。あなたの言いたい事はそれだけですか？」

私がこんなにも怒りを露わにしているのに、声色一つ変えない死神
がなんとも不気味に見えたが私も後には引けなかった。

「じゃあ、私も言わせてもらいますね。」

そう言うつと死神が私を睨みつけた。死神と目が合った瞬間、鳥肌が
立った。そして金縛りにあったみたいに一歩もその場を動けなかつ
た・・・。

「あなたは本当に自分勝手な人間だ。責任がないと言い出すなんて・・・。
あなたは良い人間？悪い人間？それとも、どちらでもない普通の人間？生きていた時にあなたがどうだったかなんて、そんな事私にはどうでも良い事です。」

あなたが行くのは天国？地獄？それも私には何ら関係のない事。私
はあなたに審判を下す裁判長であり、あなたは被告。そして周りに
いる人間たちは証言者。それ以上でも、それ以下でもない・・・。」
死神の言葉を私はただ聞いていた。

「つまり、私には特別な感情が無いという事です。あなたにも、
ここにいる全ての人間に対してもね・・・。
ところで、あなたはさっき、嘘をついてもわからないと言いました
ね？」

「ああ。」
「それは違いますね。ここにいる人間は嘘をつきません。というか
嘘をつけないんです。」

生き物というのは皆、脳で考え、それが伝達されて話したり、体を
動かしたりしますが、それは器があるからこそ初めて成り立つので
すよ。

先程も言いましたが、ここにいるのは人間の魂。だから脳で考えて
行動するのは訳が違つのです。あなたにはここにいる魂の姿が普
通の人間の姿と何一つ変わらない様に見えるかもしれませんが、
本体はここにはいません。肉体はこの世界には来る事ができないで
すからね。魂には脳なんてありませんからね。」

死神は丁寧に説明してくれたのだらうが、今まで？人？として生き
てきた私にはいまいち実感することができなかつた。

「難しいですか？じゃあ魂の本来の姿を見せましょう。」
そう言つて死神は指を鳴らした。すると、周りにいる人がだんだん
と透けていった。そしてその場に様々な色の光を放つ丸い球体が浮
かんでいた。

「男、女。大人と子供。魂によって大きさや色は違いますが、これが魂本来の姿です。そして関係者とは証言者の事。それはもう理解できたと思います。それらが発するのは魂の記憶！言葉であって言葉じゃない。記憶なんです。つまり、人間が死ぬまでに経験した記憶が証言となるのです。」

「ここにいる人間たちは直接的じゃなくてもあなたの記憶を持っているんですよ。」

「そんな事を言われても納得などいくはずもなく、私の怒りは治まらなかった。そんな私の感情を察した死神は呆れた様子で言った。」

「今までの人間たちは、あなたが死んでから関係を持った人間たちでした。だから現実を

受け入れられないのですね？」

「違う！受け入れる、受け入れないの問題じゃない！私は正しい事を言ってるだけだ！」

「わかりました。もしも次の関係者があなたの知り合いでも、同じ事を言っていられませんか。ちょっと順番が違いますが、次の証言者はこの人間にしましょうか。」

「そう言っただけで死神はまた指を鳴らした。するとまた人が現れそのなかに球体が隠れていった。」

「では、神の審判を再開します。証言者は前へ！」

「本当は最後の方で証言する予定だったのだから。後ろの方から人間を縫って歩いてくる女性が見えた。だんだんと近づいてくるその人を私は知っていた。そして驚きのあまり言葉を失った。」

証言者 女

「あなたはこの被告の関係者ですか？」

「はい。私はこの男の関係者です。」

「それではあなたはいつ、被告の関係者になりましたか？」

「私はこの男と出会ってしまった時に関係者になりました。」

「そうなんですか。ではあなたと被告は顔見知りということですね。」

「白々しそうに死神が言った。」

「では、あなたと被告の関係はなんですか？」

「私は被告の妻です。」

「そう、証言台に立って話しているのは紛れもない私の妻だった。少し痩せたようだが、後は何も変わらなかった。ただ、妻はずっと涙を流していた。」

「それはそれは、大変でしたねえ。」

「はい。夫が自殺したと聞いた時は正直ショックでした。私が家を出て行ってしまったのが原因だと思い自分を責めました。それに、これからどうして行けばいいのか分からなくなってしまうて……。」

「そうですね。自殺したのが自分の夫ですからねえ。」

まさか妻がそんなことを言うとは思ってもいなかった。

（妻は私を恨んでいたはず……。それは私の思い違いだったのか？ そんなはずはない！）

実際、妻は家を出て行ってしまった。まだ別れてはいなかったものの、離婚届も渡されていた。思い違いなんかじゃない。

「家を出てからも、夫の事は心配でした。後悔もしました。」

でも、今更やり直ししようなんて、とても言えませんでした。私は、夫の事を何もわかってなかったんです。

だから、夫が自殺したのは私のせいなんです！」

「おや？ではあなたは旦那さんではなく、自分が悪いとおっしゃるのですね？」

「はい。全て私が悪いんです。」

いくら自分を責めても私には責任がある。周りからも責められ、私は、私は……。」

自殺を決める前、残される妻や子供の事を考えていなかった訳じゃないが、まさか私の死が妻をこんなにも追い込むことになるうとは

考え付かなかった。

「そうですか。悲しみはいつか消えます。でも心の傷が消えるのは時間がかかる。いや、時には消えない傷もある。あなたの場合は後者かもしれないですね。」

「それで、あなたの傷は癒えましたか？」

「いいえ。いくら時間が経っても私は癒える事なんてありませんでした。」

私は妻と死神の会話をただ聞く事しかできなかった。

言葉では自分に非が無いと言ったものの、多少なりとも責任を感じていた私は、他人ではない自分の妻の言葉に、自殺という愚かな行動とってしまった事を悔やんでいた。

もしも私が、妻の事をもう少しわかってあげられていたらこんな事にはならなかった。

妻も同じ思いだっただろう。何もわかっていなかったのは私の方だった……。私はいつの間にか泣いていた。自分が許せなかった。憎んだ。そして、もう戻る事はない人生に後悔していた。

そんな気持ちでいっぱいになった私の前で、妻は言った。

「それで、自暴自棄になつて……。もう生きている事自体が辛くて私は……。責任を取るため、これから夫と同じように線路に飛び込みます。」

その言葉を聞いた瞬間、抑えていた感情が一気に溢れだしてきて、私はその場に崩れ落ちてしまった。私のせいで、私が自殺してしまつたせいで、妻までも死ななきゃならないなんて……。

その現実を知つた今、私には絶望観しかなかった。そして、涙も止まる事は無かった。それでも死神は淡々と自分の仕事を続けた。

「証言者、最後に言い残した事はありませんか？」

死神の言葉に妻は私の目を見つめ

「ごめんね。」

と一言だけつぶやいた。

「待ってくれ！死なないでくれ！」

と私は精一杯叫んだが、妻の姿は目の前から消えていった。それが最後に聞いた妻の声だった。

私の耳には、いつまでも妻が言った

「ごめんね。」

という言葉が残っていた……。

妻が目の前から消えてからも私はずっと泣き続けていた。いつたいどの位の涙をこぼしたのだろうか。しかし、いくら泣いても悲しみは消えなかった。

「これでもあなたは、自分に非が無いと言えますか？」

私はもう反論することはなかった。話す気力もなかったが、自分が間違っていた事を思い知らされたからだ。

（わ、私は、妻を……殺してしまった……。）

その思いだけが頭の中で繰り返されていた。

何も答えず、ただ泣いている私を見て、

「どうやら、わかってくれたみたいですね。あなたみたいな人間を担当すると苦労しますよ。」

と死神は言った。

「えーっと、最初の人間と、病気で亡くなった事になった人間。そしてあなたの奥さん。あなたは、これで三人の人間を殺した事になります。」

あなたはいつたいどの位の人間を殺す事になるんですかね。」

妻の自殺は私のせいである事は間違いない。そしてさっきの人達も私のせい……

私は殺人者だ……。

死ぬまで、こんなにも自殺というものが周りに影響を与えようとは考えていなかった。

テレビのニュースで、毎日の様に流れる誰かの死。有名人ならともかく、顔も知らない見ず知らずの人が死んだと聞かされても何にも

感じない。その位、人が死ぬというのはごくありふれた事だ。

しかし、今は例えあかの他人が死んだとしても、私の自殺が関係しているかぎり、それを背負わなければならない。それが自殺を選んだ者の責任であり義務なのだ。

私は死神が始めに言っていた言葉を思い出し出していた。

「あなたと関わった人間がこれからどういう人生を辿るのかも、あなたは知る義務があるのです！」

その意味がようやくわかった気がした。私は自殺という行為でどれほどの人に迷惑をかけたか。それに、この神の審判自体が天国と地獄、どちらに逝くのかを決めるものではなく、私の責任を問う裁判なのだという事もわかった。

そう、これから逝く場所など裁判なんかしなくても始めから決まっていた。私が逝くのは、地獄だ……。もしも、天国という選択肢があつたとしても私は地獄を選ぶだろう。それが妻に対してのせめでの償いだから。それが私の運命。

しかし、どれだけ償つても、妻への罪悪感は消える事はないだろう。そして、この悲しみも消える事はない……。

私はまだ泣いていた。今はただ泣く事しか出来なかった。

「泣いているところ申し訳ないんですけど、次の証言者を呼んでもよろしいですかね？ほら、まだまだいっぱいいるんですよ。証言をしいって人間が。」

そんな事はわかっていた。しかし、私はもうまともに話を聞ける状態ではなかった。だが死神は自分の声が聞こえていないと思つたのか、

「もしもーし、聞こえてますか？次の証言者呼びたいんですけどー。」

と呑気な声で話しかけてきたのでつい、私は

「もう止めてくれ！」

と叫んでしまった。もう私には耐えられなかった。

「もう、充分だ！こ、こんな裁判……。妻も私のせいで死んでし

まった……。

私は地獄に行つて罪を償う。だからもう、裁判なんか止めてくれ！」

「そうはいきません。あなたにはここにいる

全員の証言を聞いてもらいます。」

「どうして……。この裁判は私の逝く先を決めるんじゃないのか？」

「その通りですよ。」

「だったら、もういいじゃないか！私にはもうこの裁判に耐えられる自信がない……。」

地獄に……。私を地獄に連れて行つてくれ。」

「あなたの気持も分からないではない。でも、ルールはルール。決まりには従ってもらいます。」

私は精一杯、死神にお願いしたつもりだったが、死神の答えは変わることはなかった。そして続けて話し出した。

「地獄に連れて行つてくれ？その言葉が私には、ただあなたが逃げている様にしか聞こえません。」

あそこにいる人間はどうなります？あの子供は将来、プロの野球選手になる予定でした。でも、あなたが飛び込んだ時ちょうど電車に乗っていて、転んだ拍子で手首を折る怪我。それが原因であの子供の将来は変わってしまう事になる。

じゃあ、あの人間はどうです？あの人間はあなたを轢いた電車を運転していました。でも、事故が原因で電車を運転するどころか、車も運転出来なくなつてしまいます。あなたの事故がトラウマで後々仕事も辞める事になるんですよ。

あの人間だってそうです！あのお婆さんは、電車が急ブレーキを掛けたせいで、横に立っていた人間に押され倒れてしまう。その時、頭を強く打つて亡くなつてしまいました。

あつちの人間は、ただ電車に乗っていただけなのに、あやまってお婆さんを押ししまい殺してしまう。自分には責任が無いと分かっている、人を殺してしまつた罪悪感をこれから一生背負うことに

なるでしょうね。あの人間も、あそこの人間も・・・。

それでもあなたは、自分だけこの場から逃げて、地獄で罪を償いたいと？

あなたが償いたい罪とは、あなたの奥さんに対してだけのものじゃないんですか？」

その死神の言葉は正しかった。今の私の中にある罪悪感、全て妻に対してのもので、他の人の事などまるで考えていなかった。

「ですから、あなたが耐えられるか耐えられないかなんて、そんな事でこの神の審判を止めるわけにはいきません。

それに、全員の証言が終わるまでは、天国にも地獄にもあなたの逝く場所なんてまだないのですから。神の審判が終わって初めて、あなたの居場所が出来るのです。

もしもあなたが本当に耐えられなくなったとしても、この場所からは逃げる事も出来ません。

証言を聞くのが嫌になって耳を塞いだとしても、あなた自身が魂という存在ですから、証言は記憶として刻まれるでしょう。

もう分かったでしょう？この神の審判に途中退室なんて許されていないんですよ。」

そしてまた死神の言葉で次の証言者が前に歩いてきた。だが、私は一切その人を見る事はなかった。そして心に大きな穴が空いてしまったように、その人の言葉も、死神の言葉も耳には入らない。ただ私の中を通り過ぎていくだけだった。

しかし、証言者が消えていった時に初めて、その人の身に起きた出来事を知ることになった。おそらく、これが死神の言っていた魂の記憶というものなのだろう。知らないはずなのに、実際に目にしたかのように私の中に残っていた。

次々と証言台に登っては何かを話して消えていく人達・・・。

そのたびに私の中には新たな記憶が刻まれていった。しかし、私はもうなにも感じない。まだ、妻の事だけを考えていた。

.....

「いったい、どのくらいの時間が過ぎたのだろう。ただこうして、妻の事だけを考える事なんて生きていた時は一度も無かった。自分の中で忘れていた楽しかった記憶もよみがえってきていた。だが、楽しかったはずなのに今は思い出すだけで辛かった。

(もう・・・疲れた・・・)

私は早く裁判が終わって地獄に行く事だけを待っていた。少しでも早く、妻に罪滅ぼしをしたかったからだ。

「いつまでそうしているんですか？この神の審判も、もうすぐ終わりですよ！」

突如張り上げた死神の声で私は我に返った。

「まったく、いつまでもそうしていったって何も変わらないじゃないですか！最後位しつかりして下さい！」

私は周りを見回した。あんなにいたはずの人達の姿はもう無く、そこに立っているのは一人のお婆さんだけだった。

「じゃあ、始めますよ！ほら、立ちあがって下さい！」

私は死神の言われるがまま立ちあがった。それを見て死神はニコッとほほ笑んで言った。

「よろしい。では、再開しましょう。」

最後の証言者は前へ！」

そう言つとさっきの年老いたおばあさんが証言台に立った。

証言者 老女

「あなたはこの被告の関係者ですか？」

「はい。私はこの男の関係者です。」

「それではあなたはいつ、被告の関係者になりましたか？」

「私はこの男が線路に飛び込んだ瞬間に関係者になりました。」

「私はあの時電車に乗っていました。電車の中は混んでいたので、

座席に座れずに立っていたのですが、突然電車が急ブレーキをかけるものですから私は隣に立っていた人に押されて倒れてしまったのです。

その時、運悪く電車の扉に頭を打ってしまつて……。そのまま私は死んでしまつたみたいです。」

最後の証言者も今までと何も変わる事はなかつた。

（本当に人から恨まれっぱなしの人生だったな。）

私の人生は生きていた時も、死んでからも不幸だったのかもしれない。そしてその不幸を他人にまで撒き散らしていた。

（もし、生まれ変われるとしたら……。今度はせめて今よりも幸せになりたい。）

そう思つた。

「それで、あなたは被告を恨んでいると？」

「いや、どうせこの先そんなには生きられなかつたと思いますし、主人ももう亡くなつてますからねえ。死んで主人に会えるのならこれで良かったのかもしれないねえ。」

だから恨んでなんかいませんよ。」

私は耳を疑つた。

（恨んでない？私のせいで死んでしまつたのに……。私が殺してしまつたのに……。）だが、お婆さんは確かにそう言つた。

「そうですね。大丈夫。ご主人はあなたの事を待っていますよ。私が保証します。」

では、最後に被告に言い残した事はありますか？」

死神が告げるとお婆さんは私の方を見て

「あそこで死ぬなんて思つてなかつたけど、別にあなたを恨んでなんかいないよ。さつきも言つたけど、主人に会えると思うと嬉しくて。あなたには感謝しないといけないのかもねえ。」

あなたこそ若いのもつたいたい。まだ生きていたら楽しい事もいっぱいあつただろうに……。でもまあ、自分で決めた事だから、こんな婆さんにどうこう言われても何も思わないかもしれないけど、

生まれ変わつたら今度はちゃんと生きてみなさいね。」
その言葉はとても温かいものに感じられた。そしておばあさんはほほ笑みながら私に手を振り消えていった。
私のせいで死んでしまったのに、まさか恨んでいないなんて。お婆さんの言葉で私は救われた気がした。そして、妻の時とは違う涙を流していた。

「ありがとうございます……。」
私は、もうそこにはいないお婆さんに感謝した。

契約者

契約者

「さあ、全ての証言が終わりました。これで神の審判も終わりです。・・と、言いたい所ですが、あなたには契約者もいますねえ。本来なら関係者の証言が終わってあなたの逝く場所を告げないといけないんですけど、契約者がいる以上まだ終わらせるわけにはいきませんねえ。

申し訳ないんですけど、契約者が来るまでちょっと待ってもらえますか？」

死神はそう言うと言を鳴らした。すると死神の後ろに椅子が現れ、振り返りもせずに座った。

「まだ終わってないですけど、どうですか？少しは自分のした事が分かりましたか？」

私はまた何も言えないでいた。しかし死神は私の気持ちを感じ取ったらしく、それ以上は何も言ってこなかった。だが、こうして黙り込んでいる時間があまりにも長くて、私の方から死神に話かけてしまった。

「契約者っていったいななんだ？」

その質問に少し困った表情をしていた。そして少し考えて言った。

「今の時点であまり詳しくは説明できませんが、契約者とは関係者みたいなものですよ。証言台に立って証言もしてもらいますし・・・」

先程までの関係者はあなたの自殺が原因になって関係者になった人が多かったですね？」

わたしは頷いた。

「これから来てもらう契約者とは、あなたの自殺が原因ではないんです。」

むしろ、あなたが自殺する原因を作った。だから契約者になつたと
言つても過言ではない。それでもないと契約者にはなれませんか
ねえ。」

「自殺する原因？」

私には全然心当たりが無かつた。困惑する私に死神は言った。

「あなたにも契約者になる資格がありますよ。それはあなただけじ
やなく、全ての自殺者にその資格があります。」

それと、私はあなたに一つ嘘をついていた事があります……。」
死神は少し申し訳なさそうに言った。

「嘘？」

「はい。私は一番最初の証言者の時、あなたにこの人間の死ぬ運命
は決められた事だから変えられないと言いましたね。実はそれは嘘
なんです。」

契約者になつたら絶対には言えませんが、あの人間を救う事がで
きます。」

ただし、全ての人間を救う事ができるわけじゃありませんよ。既に
死んでいる人間は助ける事ができません。それに、救う事ができる
のは一人だけです。」

その言葉に希望が生まれた。

「それって、もしかして妻も助けることが出来るのか？」

「もちろん救う事ができます。まだ死んではいませんからね。」

ただ、奥さんが自殺するまでそんなに時間は残っていません。あつ
ちの時間で後一分……。この時間で言えば後二日位ですね。」

後一分……。後一分で妻が自殺してしまふ。いつの間にかこんな
にも時間が過ぎていたなんて……。」

だが、まだ二日時間がある。二日もあれば、余裕で間に合うだろう。

「死神！私は契約者になる。だから妻を救ってくれ！」

「そんなに焦らないで下さい。まだ契約者について説明できていま
せん。それに、あなたが契約者になるには神の審判が終わってない
とダメなんですよ。」

まあ、あなたの契約者が来るまでは話が進みませんから、今のうちに説明しておきましょうか。」

私は今すぐにも契約者というものになっても良かったのだが、ここで何も言っても変わらない事が分かっていた。さっきまでの裁判もそうだったからだ。

それに、神の審判が終われば妻を救えるのだ。ここで言い争って時間を使ってしまうのがもつたいたない。ここは素直に死神に従っていた方がいいと思った。

「わかった。じゃあ早く説明してくれないか。後、二日しかないんだろ？」

「そうですね。でも、あなたが助けるのはまだ奥さんと決まった訳じゃない……。」

死神はそう言ったが私の気持ちは決まっていた。

「先程も言いましたが、契約者になれば、人間の命を救う事ができます。ただ、条件が幾つかあります。

一つ目は、契約を結んだ時点でまだ生きている人間である事。既に死んでいる人間は生き返る事は出来ませんからな。

二つ目は、救う人間があなたの関係者である事。分かっているとしますが、あなたの自殺が原因でこれから死ぬ運命になった者しか救う事ができないという事です。全然係わりの無い人間の運命を勝手に変える事はできません。

三つ目は、救える命は一つという事です。救いたい人間が複数いようとも、誰か一人だけしか救う事ができません。

ただし、この条件には注意しなければいけない事があります。たとえば今命を救って助かったとしても二度目は無いという事です。

あなたが契約者になって奥さんを助けたとしても、もう一度自殺をしてしまった場合は助ける事ができません。

救うのは一人、一つ、一度きりだけです。

でも、ほとんどいませんけどね。私も死神になって長いですけど、そんな人間を一人しか知りません。

そして、四つ目。この条件が一番あなたに関係ある事ですから、聞き逃さない様にして下さいね。四つ目は契約者になつた者が逝くのは地獄。ただし、再生されることのない地獄です。人間はどんな罪を犯そうが地獄で罪を償い続けると生まれ変わりが認められ、新しい命が与えられます。

しかし、契約者の場合は、生まれ変わる事もなく地獄で一生罪を償い続けなければなりません。

言っておきますが、地獄という場所はあなたが思っている以上に恐ろしい場所ですよ。」

一気に話したせいか、死神は一息ついた。そして言った……。

「あなたの契約者とは、あなたの両親です。」

私は愕然とした。

（契約者が父と母？）

困惑してしまつた私を見て死神は言った。

「驚きましたか？でも忘れていただけで、あなたが自殺した原因の根本はそこにあるんじゃないんですか？」

自殺した原因なんて、いろいろあります。」

だから何が原因かなんて分からなかつたし、両親のせいなんて思つてもいながつた。

いや、本当は分かっていたのかもしれない。だが、あの楽しかった思い出を壊したくなくて考えない様にしていたのだ。

「来ましたよ、あなたの両親。いえ、あなたの契約者が。」

振り返ると、そこには私の父と母が立っていた。私の記憶の中にある、あの頃と何も変わらない父と母の姿だつた。

「お父さん！お母さん！」

気が付くと、私は父と母のもとに駆け寄っていた。

「お父さん、お母さん！会いたかつたよ……。ずっと！」

そんな私の頭を父は優しく撫でてくれた。母は私の体をギュッと、抱き寄せてくれた。そして

「ごめんね、ごめんね……。」

と何回も謝った。その目からは涙が流れていた。

「本当にすまなかった。まさか、こんな事になるなんて……。」
父も目に涙を浮かべていた。

「何で！何で二人とも死んじゃったんだよ！」
私もまた泣いていた。

しかし、悲しかった訳じゃない。嬉しかった。もう死んでいるとはいえ、二度と会う事のないと思っていた父と母に会えた事が本当に嬉しかった。

「いろいろ大変だったんだよ！」

「分かってる。」

「ずっと、独りだった。」

「ごめんなさい。」

「結婚したんだよ。」

「うん。」

「子供もいるんだよ。」

「うん。うん。」

話したい事がいっぱいあった。成長し、大人になった私を見てもらいたかった。父と母が知らない三十年間を知ってもらいたかった。

だが、父と母は全部分かっている様で、ずっと私の話を聞きながら、優しく包んでくれていた。それだけで私は幸せだった。まるで自分が子供の頃に戻った様だった。

あの頃よりも、家族らしい家族の姿がそこにはあった。そして三人だけの会話も尽きる事は無かった。しかし、その時間も長くは続かなかった。死神が会話に入り込んできたからだ。

「もうその辺にしませんか？だいぶお話もできたでしょう？久しぶりの家族の会話はどうでしたか？」

死神は私の方を見ながら言った。しかし、その目をすぐに父の方へ向け、

「どうも、契約者さん。お待ちしております。そして……お久しぶりです。」

と言った。

「ああ。また会う時が来るなんて思っていなかった。」

そう言った父は悲しげな表情をしている。

私には父と死神の関係が分からなかった。

「お父さんは、死神の事を知ってるの？」

「ああ。昔、ちよつとな。」

父の口からは答えが聞けなかったが、すぐに死神が話し出した。

「今更、隠す事も無いでしょう？もうあなたが契約者である以上、どうせ知らなきゃいけないんですから。」

私は昔、あなたの父親が自殺した時に神の審判を担当しました。」

（父も神の審判を受けていた？）

私は死んでから何も分からないまま神の審判という、あの裁判を受け、全てを理解しないまま結果が下されるのだけを待っていた。まさか、そんな裁判を父も受けていたなんて考えつかなかった。

しかし、死神が最初に言っていた言葉を私は思い出した。

「死神は死んだ者には用はないと……。」

それは違います。私たち死神は死んだもの、いや、自ら死んでいった者。そう、あなたみたいな自殺者にこそ用があるのです。」

（自殺者にこそ用がある……。それは、自殺した人はみんな神の審判を受けているという事か？じゃあ、お母さんも？）

私は横に立つ母に聞いた。

「もしかして、お母さんも神の審判を？」

母は泣きながら頷いた。

「そうです。あなたの両親は二人ともかつ身の審判を受けています。ただし、私が担当したのはあなたの父親だけで、あなたの母親は別の死神が担当しましたけどね。」

しかし、二人ともそれぞれの意思で契約者という道を選んだ。何故だか今のあなたには分かりますよね？」

「わ、私を救うため？」

「そうです。あなたを救う為！あなたに生きてほしいと願った為！二人は契約者になる事を望みました。そして一生涯生まれ変わる事のない地獄の日々を、今も過ごしているのです。」

私は両親の気持ちなど分かっていたいなかった。二人が死んだ時は悲しかった。でもいつの間にかそれが恨みに変わっていた。

しかし、父と母は死んでからも私が生きる事を一番に望んでいた。

私は何も分かっていたはいなかったのだ……。

「しかし、両親が契約者になったのにあなたが自殺してしまったのは何故か。」

本当は救われる命だったはずなのに、何故あなたはこの場所にいるのかお分かりですか？」

（そうだ……。私はもう死んでいる。父と母が自分を犠牲にしてまで救ってくれたはずなのに、私は自殺を選んだ。

いったい何故？契約者になったとしても、必ず助かる訳じゃないのか？）

私は妻を助けたいと思っていた。いや、もう決めていた。しかし、もしそうだとしたら……。私が契約者になる事に意味があるのだろうか？死神の言葉を信用して一か八かの賭けをし、それでも妻が自殺してしまつたら……。しかし、もう死んだ命。その賭けに乗るのも悪くはない。

様々な思い、考えが頭の中を駆け巡った。

「死神、一つだけ聞きたい。」

「はい。なんででしょう？」

「私が契約者になつたら、妻が助かる可能性はどの位なんだ？」

「なんだ。そんな事ですか。もし契約を結ぶのであれば現時点では確実に救う事ができます。」

私の予想とは違う答えに驚いた。

「絶対に助かるのか？」

「はい、絶対です。今なら電車で飛び込む前に考え直させる事がで

きるでしょう。」

「じゃあ、何故？何故私は死んでいる？」

私は死神の言葉にある矛盾の答えが知りたかった。騙されていると思っていた。

「何故あなたは死んでいるのか……。その質問はさつき、私があるあなたにした質問ですよ。分かりませんか？よく思い出してみてください。さい。ご両親が自殺してからの事を。あなたがまだ子供の時の事を！」

死神は答えを言わなかった。

（子供だった時の事？）

私は忘れかけていた子供の時の記憶を精一杯思い返した。

両親が自殺した後、私は父方の伯父の家で生活していた。そこでの生活は私にとって居心地の良いものではなかった。別に伯父が嫌いな訳ではないのだが、優しく接してくれる伯父を私は避けていた。優しくされるのが辛かったのだ。今思うと、本当に申し訳なかったと思っているが、まだ子供だった私は自分の事を考えるので精一杯だった。

学校生活も私にとっては苦痛でしかなかった。転校した先の小学校でも、人と関わる事を避けていた私には一人も友達がいなかった。同級生は休み時間になると、昨日のおもしろかったテレビの話や、放課後にどこで遊ぶかなど話をしていたが、私の周りには当然だが誰一人寄りつこうとはしなかった。クラスの中でも異質な私の事を、みんなは気持ちの悪い物を見るかの様に見ていた。だからといっていじめられていた訳ではない。いじめどころか誰も私を相手になどしてくれなかった。居ても居なくてもどちらでも良かったのだ。両親が死んだのに、何故私だけが生きているのか？私の生きている意味は？

毎日そんな事ばかり考えていた。そして卒業式の日。私は……。

そつだ。全部思い出した。何故今まで忘れていたのか……。あの日、学校から下校した私はお風呂に入りながら、伯父の使っていた剃刀で手首を切った。手首から流れ出してくる血が、湯船に溜まったお湯を赤く変えていった。それを見ながらそのまま私は気を失った。

(これで……。一緒の場所に……。)

その時は、なかなかお風呂から出てこない私の様子を見に来た伯父がそれを見つけ、急いで応急処置をとり救急車を呼んだおかげで一命を取り留めた。

意識が回復した私は自殺をはかった事など忘れていた。何故病院のベッドの上にいるのか、伯父から話を聞くまで分からなかったし、聞いてからも自分が自殺をはかった事に実感がわかなかった。その事だけが、すつぽりと記憶から無くなっている様な気がした。退院した後も、私の生活に何も変化はなく、ずっと独りで殻に閉じこもっていた。それは私が高校生になっても同じだった。そして私はもう一度、自殺をした……。

「全部、思い出したよ。私は、二度も自殺していた。その時に本当は死んでいるはずだったんだ……。でも、お父さんとお母さんがいたから、契約者だったから助かったんだ。」

「そういう事です。自殺の記憶が無かったのはご両親が契約者になってあなたを救う事を望んだからです。自殺願望者が死にきれないと、また自殺をしちゃいますからね。その事を思い出す事なんて普通は無いですけどね……。

しかしあなたは一度ならず二度までも自殺をはかりました。そして、ご両親の願い通り、生き延びる事ができたのです。しかし、あなたは更に死ぬ事を望んだ！」

「……。」

「あなたのご両親は契約を結んでしまいましたから、もう契約解除

はできません。これからまた地獄で自殺という罪を償ってもらいます。」

「私は、父と母を犠牲にただけだったのか？」

「そうです。」

「私が契約を結んで妻を助けたとしても、もし自殺してしまったら、それも意味の無い事になってしまうんだな？」

「そういう事です。」

「結局、絶対助かるとは言い切れないんじゃないか！」

「少なくとも今は助ける事ができます。その後の事は本人次第。ですが、普通はそこで自殺しようという意思は無くなるんです。あなたの場合は特別と言えるでしょう。だって、私はあなた以外知りませんもの。先程言った、そんな人間を一人しか知らないっていうのは、あなたの事だったんですよ。」

「！」

「死神経験は長いですけど、あなたが最初です。ですから、再び自殺をするというのはほぼ無いでしょう。」

「ですがあなたはまだ契約を結んでいませんから、別に無理に契約者にならなくていいんですよ。それに……。」

「それに？」

「もう一人関係者が残っています。あなたが契約者になるのか、それともならないのか。決めるのはそれからの方がいいと思います。」

「まだ残っていたのか……。」

「はい。これで本当に最後になります。じゃあ、早速呼びますよ。あなたの奥さんの命ももうすぐ尽きようとしている。」

「妻が死んでしまったら選択肢は無くなってしまふ。今の私には一か八かの賭けになろうとも、妻を救いたいという思いが残っていた。ここで時間を費やしている暇は無いのだった。」

「じゃあ早く呼んでくれ。こんな裁判、早く終わらそう。」

「私はそれがすぐに終わるものだと思っていた。だが、私の考えは甘かったのだった。」

「そんなに早く終わりますかね・・・。」

死神はそう言って最後の証言者呼んだ。

「では最後の証言者、前に来なさい。」

死神がそう告げると、私の目の前に真っ白なドアが現れた。そしてそのドアの取手が回り、扉がゆっくりと開いていった。扉の向こうに立っていたのは私の本当の関係者と言っても良いだろう。それに私にとって最も大事な人物だった。そこに立っていたのは私の、たった一人の息子だった・・・。

最後の証言者

最後の証言者

証言者 息子

「あなたはこの被告の関係者ですか？」

「はい。僕は被告の関係者です。」

久しぶりに聞く我が子の声だった。

「それではあなたはいつ、被告の関係者になりましたか？」

「私は生まれた時にお父さんと関係者になりました。」

そう言われた瞬間、息子が生まれてきた時の事が頭の中に蘇ってきた。

未熟児だった息子は生まれてすぐに保育器の中に移された。何の知識も無いまま出産の立会いをしていた私の中では、赤ちゃんは生まれたら泣き声をあげるものだと思っていたが、息子にはそれが無かった。慌ただしく医師が動き回る中、邪魔だったのか私は病室の外へと追い出されてしまった。心配になりながらも、心のどこかでは（大丈夫。きつと大丈夫だ。）

と、自分に言い聞かせていた。再び病室に呼ばれたのはそれから十分後の事だった。

「旦那さん、来てもらえますか？」

という看護婦さんの声で私は急いで病室へと戻った。そこには数名の医師と、保育器の中に入っている小さな赤ちゃんの姿があった。

「息子さんは生まれてきた時、息をしていませんでした。でも、今はちゃんと呼吸をしているので大丈夫ですが、念の為病室を移動しますね。」

思いもよらない医師の言葉に私は言葉を失った。しかし医師に任せ

る事しかできない私は不安になりながらもその後を着いて行つた。病室を出る時に見た妻の不安げな顔を私は今でもはつきりと覚えてゐる。そして息子は母親のいる部屋とは別の、保育器という名のとても小さな部屋の中で、沢山の管を付けながら一生懸命生きていた。出産を頑張つた妻。未熟児ながらも一生懸命に生きる息子。その時私は何もしていない自分を責めた。無力な自分が嫌になつた。しかし、そんな時支えてくれたのは妻だつた。だから妻には感謝している。もちろん生きる楽しみを与えてくれた息子にも。その時は改めて家族というものを大事に思えた。

息子を初めて抱く事ができたのはそれから一カ月してからだつた。遅くなつたが、少し大きくなつた息子を抱いた時、私の目には涙が溢れてきた。嬉しかった。妻も本当に嬉しそうな笑顔で笑つていた。(ありがとう。)

私は心の中で呟いた。それから息子は元気に育つていった。私は息子の成長を見られるだけで毎日が幸せだつた。そして、抱きかかえる事ができないほど大きく育つていった息子はもう、小学五年生になっていた。

「証言者。本当はあなたにはもつと早く証言させなければいけないかつたんですけど、遅くなつて申し訳ありません。でも、ちゃんと私なりに考えがあつての事ですので許しを願いたい。」

そう言つて死神は息子に頭を下げた。

「いいえ。全然気にしていませんから。」

そう言つて息子は死神に頭を上げる様に促した。

「ありがとうございます。では、神の審判に戻りますが、あなたは血の繋がつた親子です。なので、このような裁判の形式ではなく、二人で話してみたいかがですか?」

死神はそういうと指を鳴らした。証言台が消え私と息子の間には何も障害が無くなつた。

「話をしてもいいのか?」

私が尋ねると死神は

「もちろん。これがあなたの息子さんに送る償いであり、あなたに贈る餞別です。」

と答えた。私は急いで息子に駆け寄った。そして力いっぱい抱きしめた。

「お父さん、痛いよ。」

息子の言葉に私は慌てて手を緩めた。

「すまん、すまん。まだ痛いか？」

「もう大丈夫だよ。」

「そうか、悪かったな。背、また伸びたんじゃないか？」

「あんまり変わらないよ。」

「学校は楽しいか？」

「うん。でも勉強は嫌いだけどね。」

「彼女はできたのか？」

「お父さん、僕まだ小学生だよ。彼女なんていないよ。」

久しぶりに交わした親子の会話だった。尽きる事はなかったが、息子から突然話を切り出してきた。

「お父さん、僕も聞きたい事があるんだ。」

「そうか、ごめんな。お父さんばかり喋ってたな。なんだ？聞きたい事って？」

「。。。。。」

息子は少し言葉を詰まらせた。

「なんだ？何でも聞いていいぞ。」

そう言うつと意を決した様に口を開いた。

「なんでお父さんは死んじゃったの？」

それは、先程私が自分の両親に話した第一声と何も変わらなかった。私はそれに答える事ができなかった。

「何で？何でなの？」

「じめん。」

私には謝る事しかできなかった。

「お母さんも、お父さんが自殺したから死んじゃったんだよ！」

ショックだった。自分では分かっていたのだが、息子に言われ、周りの事を何も考えず自殺した事をまた後悔した。目からは涙がこぼれ落ち

「すまなかった。本当にお父さんがバカだった。」
私は心から謝罪した。

「でもな、お母さんはまだ助かる。だから、お父さんの代わりに前がお母さんを支えてあげなきゃダメだぞ！」

「本当に？お母さんは死なないんだね？」

「ああ、本当だ。だからこれからは二人で生きて行くんだぞ！」

私は自分がいなくても二人が幸せならそれで良かったのだ。だが息子は急に暗い顔になった。そして

「二人で生きて行く？そんなの無理だよ。」
と言った。

「何でだ？もうお父さんは生き返る事ができないけど、お母さんは助かるんだぞ！」

「。。。。。」

息子はまた声を詰まらせた。そして少し黙って話し出した。

「だって、お母さんが死ななくても、僕が。。。僕が死んじゃうんだもん。」

私は絶句した。

決断

決断

「死んじゃうって？お前が？」

「そうだよ。僕も、自殺するんだ。」

「……………」

私は息子に理由を聞けないうでいた。一瞬、

「何故？」

という言葉が口から出そうになったが、寸前で口にするのを止めた。息子の口から理由を聞くのが怖かったのだ。

理由が怖い？他人からしてみたらそんなバカな理由と思うかもしれないが、私には理由は分かっていた。親子だからという訳じゃないが自分と、自分の子供の頃と同じなのだと思信した。だからこそ聞けなかった。

「ごめん…………。ごめんな…………。」

私は泣きながら謝り続けた。それは私が息子に見せた最初の、そして最後になるであろう、涙だった。

今更謝罪しても何も解決しないのは分かっていたが、謝る事だけが私にできる唯一の事だった。

「もう、遅いよ…………。」

別に息子に許してもらいたいなんて思っていないかった。許してもらいたい為に謝っている訳じゃなかったが、息子の一言が今の私をより一層苦しめた。そうだ。何もかも遅いのだ。生きていたら、まだ何とかなつたはずだったのに、死んでしまつては何もすることができない。全て、私の自分勝手な自殺から始まつたのだ。

「父さんは、お前の事も、母さんの事も愛してたんだ…………。生きている内に言えなくて本当にごめんな…………。」

「僕だつて！お父さんが大好きだつたよ！お母さんが大好きだつた

よ！でも何で？何で二人とも僕を独りにして死んじゃうんだよ！だから・・・だから僕も死ぬしかないじゃないか！今更そんな事言っただって遅いんだよ・・・。」

（死んでから、こんなにも周りの事が分かるなんて・・・生きている内に知る事ができたら・・・。）

そんな事を考えたが、それも全部自分の責任なのだ。気づけたはずの事も、自分が関心を持たなかったから見逃していたに過ぎなかった。私には自殺した事に対する後悔しかなかった。

「あなたにも自殺という罪の重さが分かったでしょう？時によって、自殺は殺人よりも罪が重いのです。自ら命を絶つというのがどれ程の影響を与えるのか・・・。神の審判の理由が分かってもらえましたか？」

死神はそう言うのと私の前に歩いてきた。そして、胸の内ポケットから一枚の紙切れとペンを取り出し、俯いている私の目の前に差し出した。

「これは？」

私は顔を上げ、死神に尋ねた。

「これが、契約書です。」

そう言っただけその紙を広げて見せた。

契約書

私　　は、自らの運命を引き換えとし、
　　の命を救う事を切に願う。

平成21年5月15日

13時10分08秒

その紙にはそう書かれていた。

「あなたが契約者になることを望むのであれば、ここにあなたの名

前と、助けたい魂の持主に名前を記入して下さい。今すぐにとはいけません。考える時間はあります。契約者にならないのであれば、契約書を私の目の前で破り捨てて下さい。

ただし、契約書は一枚しかありませんので、もし破いた後に気が変わったとしても、もう誰も救えませんのよく考えて決めて下さい。

それに、もし複数名の名前を記入したり、字を間違ったりしても無効になりますから注意して下さい。」

そう言っただけで私に契約書とペンを握らせた。

「あっ、そうそう。あなたの奥さんですが、その契約書に書かれてある時間でいうと14時15分には自殺してしまいますから、もし奥さんを救うのであれば、それまでに書き終えないと手遅れになってしまうので気をつけて下さいね。」

契約書に書かれてある時間は時を刻むごとに字も変化していた。

平成21年5月15日

13時15分45秒

妻が自殺するまで、後一時間を切っていた・・・。

私は悩んだ。どうしていいのかわからなかった。できることなら二人とも助けたい。二人には生き続けてほしい。しかし、どっちかを選ばなければならぬ。その葛藤でおかしくなりそうだった。こうしている間にも妻の寿命は刻一刻と迫っていた。

「悩みますか？悩みますよね？それでいいんです。それが人間なのです。一生に一度は運命の決断を迫られる時がくるのです。あなたの中にある選択肢は三つ。

一つは契約を結ばないで地獄で再生を待つ事。あなたの両親もそれを望んでいるんじゃないですか？」

私は父と母を見た。二人ともまだ涙を流していた。親からしてみれば自分の子を助けたいと思うのは当然だろう。

私が契約者になってしまったら、父と母のしてきたことを全部無駄

にしてしまう。私の為に契約者になったのに、それを意味の無いものにしてしまうとしている自分に気付いた。

「もう一つは奥さんを助ける事。もうあまり時間がありませんよ。」

私は力いっぱい握っている契約書を見た。

平成21年5月15日

13時59分11秒

後、15分足らずで妻が死んでしまう。こうしている間にも、死へのカウントダウンは刻まれているのだ。

「もう一つは息子さんを救う事。あなたと同じ運命を辿ろうとしている息子さんを、あなたは見捨てますか？それとも、あなたの両親がそうしたように、あなたも契約者になって自分の子を救いますか？」

私の分も息子には幸せになってもらいたい。我が子の死など考えたくはなかった。本当なら子供を助けたいと一番に思うのが親というものだろう。

しかし、息子を救ったとしても、私の様に心の何処かにトラウマを抱え、もしもまた自殺をする様な事があつたら？それを思うとすぐに答えを出すことはできないでいた。

「あなたは生きている時、現実から逃げればかりいた。だから今の場にいる……。今度ばかりは逃げられませんよ。」

死神はそう言つて私の目をじっと見つめていた。私にはその顔がものすごく恐ろしく見えた。時間が……。ない。決断の時は迫られていた。

「私は、私は……。」

その時は、それが本当に正しい選択だったのか分からなかった。

「私は……。契約者になる。」

しかし、生きてほしいという一つの望みをかけて私は契約者になる決断をした。

「本当によろしいですか？」

「ああ。もう決めた。」

「わかりました。じゃあ、あなたの名前と助ける者の名前を。」
契約書を書く私の手は震えていた。後悔していたからじゃない。地獄に行くのが怖いからでもない。何故かわからないが震えと涙が止まらなかった。

契約書を書き終えた私は、死神に紙を渡した。あんなに震えていた手の震えがいつのまにか病んでいた。

「確かに。あなたは契約者として認められました。」

死神は契約書を畳んで胸の内ポケットの中にしまいこんだ。私は両親に、この決断を謝らなければならなかった。私は涙をこらえ父と母の方を向き頭を下げた。

「お父さん、お母さん……。」

最後の最後まで、バカで、親不孝者で迷惑ばかりかけて……。
自分勝手な子供でごめんなさい。」

私は頭を上げる事ができなかった。両親の顔を見る事ができなかったのだ。私はそのままの姿勢で泣き続けていた。

そして頭を上げた時には、両親の姿も、息子の姿もそこには無かった。また、その何もない空間には私と死神の二人だけが残された。

「さて、これで全て終わりです。お疲れさまでした。もう少ししたら、あなたにも迎えがきますよ。最後に言い残した事はありませんか？」

しかし、私には言い残した言葉など何も思い浮かばなかった。大切な誰かの為に自分を犠牲にするなど生きていた自分からは考えられなかった。自分を殺す事で、初めて人になれたのかもしれない。そして、こんなにも自分は愛されていたという事も分かってしまった。私は、最後の最後まで気付けなかった。本当にバカだった。

「私は……。」

そう言いかけた時、光が私を包んだ。もう時間が残されていなかった。

言い残した事などないはずだったが最後に、自分が消えてしまう前に、言いたかった事があった。

「もっと・・・」

「生きたかった・・・。」

そして私は、地獄に落ちた・・・。

死神

死神

「はあー。やっと終わりました。今回は結構疲れましたねえ。

まったく、死神も楽じゃないですよ。また誰かが自殺したらすぐ呼ばれるし……。ゆっくり休みが欲しいですねえ。

でもまあ、いろんな人間がいるから飽きないんですけど。

でも、何で人間という生き物は自殺するんでしょう？そんなに死にたいものなんですかねえ？与えられた命を全うすれば天国に逝けるのに……。自殺なんてしたら待ってるのは地獄だけ……。

神の審判だって逝く場所を決める裁判なんて言ってますけど、自殺者には地獄以外に逝く場所なんてないのに。」

死神は少し考えて言った。

「もしかしたら、それが分かってたら自殺なんてしないんですかねえ。

……。

でも、生きているより地獄に逝く方がマシだと思う人間もいるんでしょうね。

これだけは何度神の審判で判決を下しても分かりません。」

その時、辺りに鐘の音が鳴り響いた。

「はあー。またですかー。次の神の審判が終わったら、休暇の申請でもしましょうかね。今度はどんな人間が自殺したんですかねえ。」

そう言うと、死神は歩き出した。そして歩きながら指を鳴らした。

すると死神の手の上に紙の束が現れた。それに目を通しながら、死神はニヤッと笑った。

「これだから死神は辞められないんですよ。」

そう言っつて死神の姿は消えていった……。

何も無い真つ白な空間……。そこに一人の男が立っていた。辺りを見回し動揺している様子だ。男には、今自分の身に起きた全ての出来事が理解できていなかった。

「どこだ？ここは？」

そう言うと男はあてもなく歩き出した。ありもしない出口を探すかのように、一心不乱に歩いていった。いったい何時間歩き続けているだろう。もう疲労で一歩も歩けそうにないと思ったその時、遠くの方に一人の人物の姿を見つけた。突然迷い込んだこの場所に、自分以外の人間がいた事が嬉しくなり、男は疲れた体に鞭を打ってまた歩き始めた。ようやくその人物の所まで来た男は息も絶え絶えでその場に座り込んでしまった。

「はあ、はあ、はあ。やっと、着いた。はあ、はあ、君もここで、迷っているのか？」

男はそのときちんとその人物の姿を見た。そこには全身黒い服を着た小柄の若い男が笑みを浮かべながら立っていた。

「いえ、私は迷ってなんかいませんよ。あなたをお待ちしております。どうも、お久しぶり……。じゃなかった。はじめましてでしたね、すみません。いや、以前会った気がしたもので……。」
そう告げられ、男は少し考えて言った。

「待っていた？君は誰なんだ？」

「私は、死神です。あなたは先程、自殺しましたね？その件で、あなたを待っていたんですよ。」

男は驚いた顔をみせた。それは自殺した事を当てられたからだだった。

「何でそれを……。確かにさつき首を吊って自殺した。」

「知ってますよ。」

「本当は自殺なんてしたくなかったんだ……。だけどリストラさ

れて……。でも、私のせいじゃないんだ！誰か知らないが線路に飛び込んだバカな奴がいて……。それで大事な契約がパーになって……。そいつが、そいつさえいなかったら、私は自殺しなくて済んだんだ！」

男は怒りを抑えられなくなり声を荒げた。しかし、それとは対照的に死神は冷静に答えた。

「知ってます。あなたに何が起こったのかは全部知ってますよ。私は死神ですからね……。クツ、クツ、クツ。」

死神は薄気味悪い顔で笑いつづけた……。

それから・・・

それから・・・

それはとても暑い日だった。もう十月も終わろうとしているのに、まだ残暑が厳しく部屋の中では扇風機が回っていた。

六畳位の部屋の中に、そこには似つかわしくない立派な仏壇があった。扇風機は人がいない部屋の中を、まるで誰かを探すかのように首を回し続けていた。

すると、隣の部屋から一人の青年が戸を開け入ってきた。髪は寝癖のまままで、大きな欠伸をし、いかにも今起きたばかりという姿のままそこに立っていた。

「まったく・・・。また扇風機つけっぱなしだよ。」

青年はそう呟くとそのまま仏壇の前に座り手を合わせた。

「俺、今日で二十歳になったよ。父さんが自殺してから、もう十年も経つんだね・・・。あれから色々大変だったけど、何とか頑張ってます。」

青年はそう言つと扇風機を止めた。

「俺は元気でやってます。そっちも天国で元気でやってますか？」その時だった。玄関から、ガチャッと鍵を開ける音が聞こえた。そしてドアが開き、一人の女性が入ってきた。どうやら買い物をしてたらしく、両手いっぱい買い物袋を持っていた。

「あつ、やっと起きたの？今日は誕生日だから、今の内に買い物行っちゃった。晩御飯はあなたの大好きな、ハンバーグでいいわよね？」

そう言いながら、買ってきた食材を冷蔵庫に詰め込んでいた。

「ねえ、また扇風機回しっぱなしだったよ。」

「あれ？そうだった？ごめんなさいね。」

そう言ったものの、手を休めることなく、半分聞いているのかいな

いのか分からない様子に、青年は少し呆れていた。

「もう歳なんだから、しっかりしてよね！それに、俺もう二十歳だよ！いつまでも子供扱いしないでくれる？」

「何を言ってるの？あなたはいつまでたっても私の、私とお父さんの子供じゃない！親の側にいる内は何歳になっても、子供は子供なのよ。」

そう言うと母親は仏壇の前に座った。息子は母親が横に座ったので気まづくなつたのかその場から立ちあがり、台所へ行って何か食べる物がないか探した。母親は手を合わせて仏壇の写真に話し始めた。

「あなた……。あれからもう、十年が経つよ……。」

「母さん、それはさつき俺が言つたよ！」

息子は冷蔵庫の中に顔を入れながら言つた。

「あら？そうなの。」

「こっちはみんな元気ですよ。」

「母さん、それも言つたよー。」

冷蔵庫から探したのか、今度はパンを口にくわえながら言つた。

「いいの！私も話したい事があるんだから！邪魔するんだつたら向こうの部屋にでも行つてもらえる？」

「はい。すみませんでしたー。」

息子は母親に促され、スナック菓子を持って隣の部屋へと移動した。静かになつた部屋で母親はまた話し出した。

「あなた、今の見てた？生意気に育つちやつたでしょ？やっぱり、片親だったのが原因かなあ……。」

でもね、優しい所もちゃんとあるのよ。そこはあなたに似たのかしら？」

すると息子が隣の部屋から顔を覗かせて言つた。

「優しいって所は、ちゃんと報告しててねー。」

「あらやだ。聞いてたの？ウフツ、フフフ。」

「急にどうしたの？何笑つてんの？」

「何でもないのでよ。ただ良かったなーって思ったの。」

「良かったなーって何が？」

「いろいろよ。」

「いろいろって何だよ。」

母親は笑っていた。

「生きてて良かったなーって事よ！」

「何だよ、気持ち悪いなー。」

「フフフツ。」

家族の何気ない会話……。

しかし父親の姿はなく、そこにあるのは遺影だけだった。

それでも、母と子は毎日を楽しく過ごしていた。それは、天国で父が見守ってくれているという思いからだっただろう。

だが、父親は天国にはいなかった。家族の幸せと引き換えに自分を犠牲にしたから……。しかし、そんなことは誰も知らない。

本人と死神以外は……。

その様子を遠くから見ている姿があった。

「良かったじゃないですか。あなたが望んだ通り、二人とも幸せそうですね。」

死神が言った。

「ああ。」

男は一言だけ答えた。

「でも、あなたが契約を結んだ時点でこうなると思ってたんですか？」

男は少し考えてから答えた。

「確信は無かった……。でも、きっと生きてくれると思った。

息子は子供の頃の私に似ていたからな。」

「そうですね。あなたが契約者になる事は何となく予想が付いたんですけど……。」

まさか、息子さんじゃなく、奥さんを助けるとは思いませんでしたよ。」

男はあの時の事を思い返していた。

「私はあの時、どちらかを選ぶかなんてできなかった。どっちかが死ぬのなんて耐えられなかった。」

その時思い出したんだよ。自分の両親が自殺した時の事を……。息子を助けたとしても、両親が自殺したという悲しみを、一生胸に抱えながら生きていかなければならない。その辛さを私は知っているからな。

息子にそんな思いはさせたくなかった。」

「なるほど。」

「それに、妻が生きてさえいれば息子も自殺はしなかったから……。」「

「そうですね。ある種、賭けに出たって事ですね？」

「死神、それは違う。私は賭けに出た訳じゃないんだよ。」

私は信頼していたんだ。」

「信頼？」

「そうだ。私は家族を信じていたんだよ。」

「ふーん。信頼ですか。私にはよく分からないですね。」

「死神、お前も家庭というものを持てば分かるよ。」

「そんなもんですかね。」

その男は活き活きしていた。

もう死んでいるのだが、それを感じさせない風に見えた。

男は笑っていた。

地獄で辛い毎日を送っているはずなのに、確かに笑顔だった。

「お邪魔しましたね。私はそろそろ帰らせてもらいますよ。」

「そうか。わざわざすまなかったな。」

死神も忙しいんじゃないのか？」

「あつ、それでしたらお構いなく。私今、長期休暇中ですから。でも、それも今日で終わりなんですけどね。帰ったらまた自殺者の相手ですよ。」

「そうか……。」

「なにか、言いたそうですね？」

「いや、何でもないんだ。ただ……。」

「ただ何ですか？」

「どうして人は自殺するんだろうなあ？なんて思ってたね。」

「それは私なんかより、あなたが一番分かっているじゃないですか。」

「そうだな……。」

「どうしました？あまりの地獄の過酷さに、おかしくでもなりませんか？」

「いや、気にしないでくれ……。」

「まつ、とにかく頑張ってください。それしか言えませんが。」

「じゃあ、もう会う事は無いと思いますけど……。」

「そうだな。私もそれを願うよ。」

「では、お元気で。」

「ああ、お前もな。」

その後、その男は死神と二度と会う事はなかった。

しかし、今も死神たちは毎日働き続けていた。

そしてこれからもずっと、それは続いて行くのだろう……。

今日もまた、あの声が聞こえてくる。

「あなた、先程自殺しましたね……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6514i/>

自殺日誌

2010年12月10日17時45分発行